

## 中国残留孤児の継続する「戦後」

### 発表要旨

山崎哲

多文化主義とデモクラシーと題されたセミナーシリーズにおける本発表の目的は、「多様性が排除される事態」を中国残留孤児を事例に考えることである。「多様性が増すことによって、人々は、理解し、議論する際の手間をより多く要求されることとなります。

(中略) 私たちにとって手間のかからない理解や議論が、どのような多様性を、どのように排除してきたのか<sup>1</sup> というコンテキストにおいて、中国残留孤児を例にとって検討を行うとき、そこでは、中国残留孤児らのもつ歴史性が日本社会において漂白され、かれらの存在が「中国人」というわかりやすいカテゴリーに回収されて認識されるという論点が前景化される。

中国残留孤児とは、1945 年の終戦前後の混乱において旧「満洲国」から帰国できず、1972 年の日中国交正常化を契機に日本へ帰国した<sup>2</sup>終戦当時おおむね 12 歳以下であった日本人孤児である。13 歳以上であった者らは、中国残留婦人等と呼ばれる。日本へ永住帰国した中国残留孤児・婦人等とその家族は中国帰国者と呼ばれている。現在、推計で中国帰国者は 15 万人前後いるものと考えられている。1981 年に中国残留孤児の訪日調査が始まったが、この調査は新聞、テレビやラジオなどのマスメディアによって広く伝えられた。だが近年、1980 年代から断続的に関連番組を放映してきた NHK の番組数を調べ (山崎 2022) てもわかるように、中国残留孤児関連のマスメディア報道は減少傾向にある。このような状況において、中国残留孤児の存在は、「あの時」のこととして語られる傾向が 2000 年代後半以降見られる。例えばそれは、「中国残留孤児たちは今<sup>3</sup>」(2017 年中国新聞) や「共生へ…本格帰国から 40 年、中国残留孤児の今<sup>4</sup>」(2021 年中日新聞) といった新聞メディアのタイトルに見ることができる。

中国残留孤児は日本社会に忘れられつつも、日本社会を生きてきた。かれらは日本永住帰国後、日本語ができないままいわゆる非熟練労働者として働いた。多くは、日本語の使

---

<sup>1</sup> 明治学院大学 2023 春学期公開セミナーフライヤーより引用。

<sup>2</sup> 日本へ帰国せずに中国で生きることを選んだ者や、中国残留孤児であることを証明する書類が揃わず日本への帰国を希望するが叶わない者も存在する。

<sup>3</sup> <https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?junior=2017-88>

<sup>4</sup> <https://www.chunichi.co.jp/article/240237>

用をそこまで求められない単純労働に従事したため、余裕のある生活を送るに足る賃金を稼ぐことはできなかった。「母国」の言葉である日本語の「学習」には多くの時間を割り当てることは不可能であった。「日本語ができない」という問題は、かれらが老齢になった現在、介護問題にまつわる問題として顕在化している。1945年当時に0歳であった者も現在は78歳となっており、中国残留孤児と呼ばれる人々は全員が後期高齢者となった。介護施設に通い出した彼らは、施設に在ることの困難に直面した。「施設に入っても、日本語がわからなくて、馬鹿にされる」（馬場田 2009）、中国人を差別する状況がある、介護施設の生活習慣や食事があわない（辻村・石垣・胡 2014）、「中国人だから一緒にしゃべりたくない」、中国人同士の中国語での会話に嫌気がさし、日本人が時々席を離れていく（王（木下）・渋谷 2018）といったように、「中国人」として施設で認識され、馬鹿にされ、差別され、避けられた。複雑な歴史を背負い生きてきた「日本人」である中国残留孤児は、日本社会においてこのように、「日本人」ではないものとしてまなざされたのである。『言葉が分からなくてね。いじめられていると思ったの』と語る中国残留孤児の女性が、言葉や文化の違いから他の利用者とは打ち解けることができず、日本語中心の集団生活にもなじめなかったため、骨折を機に入所した介護施設で自殺を図った（日本経済新聞 2018年5月14日<sup>5</sup>）と伝えられたことがあった。これらの事例が示すように、戦後日本社会において“多様な「日本人」”として存在する中国残留孤児らは、現在、かれらの生きてきた歴史が漂白され、「中国人」として社会にまなざされて生きているのである。

日本のポストコロニアリズムの課題として姜は「コロニアリズムの『消失』と『戦後』の前景化の成功で覆い隠されたものは何か」（姜 2001）を問う必要性を述べる。それは言い換えるならば、帝国であった日本が、「戦後」、帝国の記憶を忘却してきたことで日本社会が何を見ずにきたのかを問うことである。中国残留孤児らは旧「満洲国」に移民してのち、「戦後」空間の成立によって帰国が叶わなくなり、また、帰国後はその歴史が忘却されている「戦後」社会に生きることになった。「戦後」空間のなかでその存在が不確かなものとなっているのは、孤児らだけではない。その子、孫、ひ孫の世代においても、中国残留という家族史をどのように引き受けていきるかはかれらの人生の方向性に大きな影響を与えている。

中国残留孤児の継続する「戦後」とは、日本社会が「帝国の過去」を忘却することでかれらの生きてきた歴史が曖昧になり、日本人でありながらも“日本語を話せない「中国人」”とまなざされているという、今に続くアクチュアルな時間の経過であり、現在なのである。

#### 参考文献

王榮(木下貴雄)/渋谷努(2018) 「中国帰国者の介護問題から見た在住外国人高齢者への介

---

<sup>5</sup> <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO30447170U8A510C1CR0000/>

- 護支援の現状と課題—異文化介護の現場から—, 『社会科学研究』, 38(2), 2-18.
- 姜尚中 (2001) 「「ポストウォー」(戦後) から「ポストコロニアル」(植民地以後) へ」姜尚中 (編) 『ポストコロニアリズム』 作品社, 106-114.
- 辻村真由子、石垣和子、胡秀英(2014) 「中国帰国者 1 世・2 世とその中国人配偶者に必要な看護支援の検討— A 県在住者を対象とした健康状態と医療・看護・介護ニーズの実態調査から —」, 『文化看護学会誌』, 6(1), 1\_12-1\_23.
- 馬場田正美(2009) 「中国帰国者の介護ニーズ」  
[https://gpsw.doshisha.ac.jp/pdf/s\\_090516d.pdf](https://gpsw.doshisha.ac.jp/pdf/s_090516d.pdf) (2023年7月9日アクセス) .
- 山崎哲 (2022) 「中国帰国者の歴史をめぐる継承—マスメディアと三世—」, 『立命館言語文化研究』 33(3) 117-127.